

協働としての留学生支援活動 —留学生の母語を使った来日直後の留学生支援から—

遠山 千佳

1. はじめに

神田外語大学留学生別科は2000年9月に開講し、2004年度は120名の留学生を迎えた¹。その内訳を国別に見ると、アメリカ、中国、韓国、ベトナム、タイ、インドネシア、台湾、ニュージーランド、フィンランド、ブラジル、デンマーク、イタリア、ミャンマー、ウクライナと多国籍にわたっている。また、彼らの立場も神田外語大学との交換協定校からの交換留学生、私費留学生、アメリカからの短期契約プログラム生(IES生)とさまざまである。

一方、受け入れ側は外国語大学であるため、外国語や日本語教育に関心のある学生が多い。外国人との楽しい交流を夢に描いて入学する学生も多いはずである。しかし、お互いに関心のある留学生と受け入れ側学生²が存在する外国語大学であるが、何もしなければ、期待するような異文化間交流は生まれにくい(加賀美 2001、坪井 1997)。自然に出会い、交流を始めるというケースはそれほど期待できないのが現実である。

同国人同士では友達関係を育てるのは個人レベルの問題が難しさにつながることが多いと考えられるが、文化の異なる友人との交流には、更にいくつかの壁を乗り越える必要があると考えられる。加賀美(2001)は異文化間交流を阻む壁として、①物理的壁、②スキルの壁、③心理的な壁、④文化的な壁の4つの壁を挙げている。①の物理的壁は、交流する相手がどこにいるかなどの情報が得られなかったり、知り合う機会がないという壁で、異文化間交流を始めるにあたり、まず乗り越えなければならない壁である。スキルの壁はどのように交流すればよいか方法がわからない等の壁、心理的な壁は暗黙のルールが通用しなかったり、知らない相手に対する不安や遠慮等の壁である。また文化的な壁は留学生と日本人のニーズの差、価値観や習慣の差等の壁である。②～④は交流が始まってからもしばらくは越え続けなければならない壁であったり、交流が進み関係が親密になってから見えてくるような壁もあるだろう。このような壁を回避せず、乗り越えていく力は国際社会を生きていく上で必要であり、その機会が自然には生じにくい以上、教育的介入として異文化間交流の場を提供することは意義のあることである。

神田外語大学の留学生支援システムは、異文化間交流の「可能性」を提供するシステムでもある。つまり筆者等の担当者が提供できるのは、留学生と受け入れ側学生の両者がなるべく高い満足感を得られるような「可能性の場」である。そして可能性を切り開いていくのはやはり学生本人たち同士ではないかと思う。

支援システムの中には、留学生別科正規生(交換生、私費生)が関わる個人支援として2つの活動がある。来日直後の新留学生に対する支援としてのバディ活動、及び日本語学習支援を中心としたチューター活動である³。バディ、チューターと留学生の組み合わせは、毎学期新しく決定される。バディの組み合わせは留学生の母語と受け入れ側学生の学習している言語を基準にグループを決定する。チューターの組み合わせは時間割(チューター活動ができる時間帯)を基準にペアを決める。それぞれの組み合わせは、特性をもつ個人同士の組み合わせであり、交流がうまくいく組み合わせもあれば、ほとんど交流が進まな

いまま自然消滅してしまう組み合わせもある。交流がうまくいくかどうかは、個人レベルの相性もあるが、異文化間交流を阻む壁を破るだけの精神力（加賀美 2001）も影響していると考えられる。また、「交流」は人の気持ちがどちらか一方からもう一方へ流れるだけでなく、双方向、あるいは多方向的なものである。壁を破る努力をする姿勢と勇気をお互いに持たなければ交流は深まらないであろう。

本大学留学生別科の留学生支援活動の中で、異文化間交流がうまくいった例として、バディ活動で出会い、3週間のバディ活動期間が終了した後も継続して定期的に交流し、親密度を深めているペアやグループがある。親密化のプロセスは、必ずしも少しずつ進行するのではなく、関係のきわめて初期の段階ですすでにある程度決定する（横田 1990）と言われている。うまくいった例では、バディ期間中の壁への対処に異文化間交流の成功の鍵があったと考えられる。

そこで、来日直後の留学生支援であるバディ活動に参加した学生⁴を対象に、何を意識しながらバディ活動に参加していたか振り返りを行ってもらった。そしてバディ活動期間終了後も交流が続いているペアやグループに属する学生の共通点を探る試みを行った。彼らが異文化交流間に立ち上がる壁（加賀美）にどのように臨んだかを分析することにより、今後更に効果的な留学生支援、意義のある異文化間交流を促進するための資料とすることを目的とする。

2. バディ活動の特徴

「バディ」という語は日本人にとってあまり聞きなれた言葉ではないかもしれないが、英語の‘buddy’に由来する。‘buddy’には、仲間、親友、友達という意味があり、‘buddy system’になると「相互協力方式」「相棒方式」などの訳が当てられ、‘buddy’は協力者仲間を意味する。本支援の「バディ」は、来日直後の留学生がスムーズに日本の異文化環境下で活動を始められるよう、協力する学生ボランティアである。更に、受け入れ側学生が一時的なヘルパーになるのではなく、「相互協力」「相棒」というように、活動が相互行為であることも含意されている。

来日直後の留学生は、自分をとりまく言語、文化をはじめ、全てにおいて急激な環境の変化に対応しなければならない。多くの場合、すぐに相談したり助けてもらえる家族や仲間も身近にはいない。高松・白土(1996)は、援助対象者である留学生は文化差に加えて、①援助ネットワークを持っていない、②言語的意志疎通が難しい、③日本文化の文脈が読めない、④自尊心の低下という特徴を持っているとしている。そして、留学生が新たに人間関係を作れるような援助ネットワークが必要なこと、言葉だけを聞いてくれる人ではなくて問題の発生現場まで足を運んでくれて、現実を一緒に見て考えてくれる人を欲していること、「文化通訳者」が必要なこと、出身国に興味を持っている人と出会うことで、心理的な支持を得ることができるとなどを解決の糸口として挙げている。また、そこで支援の1つとして紹介されている「来日から1週間の支援」は、来日して1週間という期間が留学生の日本での適応にとって重要なポイントであるため、危機の予防的介入になるとされている。

神田外語大学留学生支援システムのバディは、留学生が空港に着いた時点から留学生に

対する支援を開始する。その特徴の1つは、バディが留学生の母語を使って支援を行うことで「言語的な壁」を低くすることである。また、留学生の母国の言語や文化に興味をもつ学生が担当することにより「文化的な壁」が低くなること、留学生の悩みや感性に共感しやすい同年代の学生が支援に当たることにより「心理的な壁」が低くなること、留学生と日常的に会いやすいキャンパス内外で支援することにより「物理的壁」を下げることなどを期待している。これらの壁を下げることにより、異文化交流が促進しやすい場を提供できる可能性とともに、来日直後の留学生が慣れない環境下で孤立感や孤独感を感じることを防ぐことができるといふねらいがある。

3. 支援実施の準備と流れ

3. 1 準備

新留学生は、入学式の1~3週間前に来日する。バディの活動期間は、留学生が来日してから留学生別科のガイダンスやオリエンテーションなどが終了するまでの約3週間という短い期間である。しかし、留学生が日本で最初の生活の基盤をつくる時期であり、また新しい環境に適応し始めなければならない時期でもあり、精神面、情報面での支援が必要な時期を担当することになる。

支援が単に留学生を手伝ってあげればよいというものではなく、そこに心と心の交流がなければ本当の支援にはならないことは、多かれ少なかれバディは心得ていると考えられる。新留学生にとって生活環境が大きく変化する激動の時期に、初対面の受け入れ側学生が心の通じる支援を行うにはどうすればよいか、短期間で考え、実践しなければならないのがバディ活動である。

募集

新留学生が入学する前学期の末（長期休暇に入る前）に募集を行う。学期末は、受け入れ側学生にとっても、学期末のレポートやテスト、サークル活動などで忙しい時期であり、募集をかけてから応募締め切りまで約1ヶ月ほどかかる。

応募資格

バディへの応募資格は、休み中に支援システムのバディ担当者（国際交流課職員、留学生別科教師）と確実に連絡をとりながら活動ができ、来日直後で通信手段を持たない留学生とも連絡がとれやすいよう、以下の条件を満たす学生とした。

- 1) 空港への出迎えができる人
- 2) 大学のメールアドレスをほぼ毎日見られる人
- 3) 携帯電話のある人

募集人数

1人の新留学生を2~3名のバディが担当するので、新留学生の人数の2倍から3倍の人数を募集する。

募集方法

2004年度秋学期は、中国、韓国、インドネシア、タイ、ベトナム、ポルトガル語の留学生には、各言語の学科や専攻を担当している先生方の協力を得てバディの募集を行った。アメリカ、フィンランドからの留学生には留学生支援メーリングリストで英語学習者を募

集した。

担当する留学生の決定

バディ活動は休み中の活動となり、受け入れ側学生もスタディ・ツアーや短期留学、旅行、帰省、アルバイト、就職活動等と多忙な時期である。そこで、一人が都合が悪くても他のメンバーでカバーできるよう、2～3名のチームを組み、2～3名で相談しながら責任ある活動をとってもらった態勢にした。また、短期間の活動であるため、受け入れ側学生も希望に応じて友達同士で同じ留学生を担当できるようにしたり、説明会でチームワークを大切にしよう指示するなど、バディ同士ができるだけ心を通わせ合い、信頼し合える状態で活動に当たるよう伝えた。

バディは自分の学習している言語を母語とする留学生を担当し、組み合わせは支援システムのバディ担当者（留学生別科講師）が決定した。

その結果、2004年度秋学期のバディ活動の参加者は表1の通り、73名のバディが、27名の新留学生の支援に当たる態勢を作った。

表1 留学生とバディの組み合わせ

時期	留学生出身国（人数）	バディの学科・専攻 ⁵ （バディの人数）
2004年度 秋学期	韓国（9名）	韓国語（24名）
	アメリカ（8名）	英米語（15名） 国際言語文化（3名） 国際コミュニケーション（7名）
	フィンランド（2名）	英米語（5名） 国際コミュニケーション（1名）
	ベトナム（2名）	国際言語文化・ベトナム語（3名）
	インドネシア（2名）	国際言語文化・インドネシア語（5名）
	ブラジル（2名）	国際言語文化・ポルトガル語（5名）
	中国（2名）	中国語（5名）
合計	27名	73名

3. 2 活動の流れ

バディの担当留学生が決定後、「バディ説明会」においてバディの仕事の流れを説明し、バディ活動のイメージを作ってもらった。その後、留学生来日1週間から2週間前に「空港出迎え説明会」を行い、空港出迎えについてとその後バディに依頼する活動内容についての詳細な説明をした。

具体的なバディ活動は、空港への留学生出迎えから始まる。ただし親戚等が出迎えに来る場合や早朝・深夜の出迎えになる場合は、来日した翌日に留学生と顔合わせをし、バディ活動を開始する。バディに依頼される活動として、空港出迎え、寮・アパートの入居に関する説明⁶、健康診断の補助⁷があり、その他自由な活動内容として、来日直後に必要な買い物、お店の紹介、図書館やコンピューター施設の使い方を含めた大学構内の案内、外

国人登録手続きの手伝い、オリエンテーションの手伝い（通訳、説明など）などが紹介されている。

尚、空港出迎えには往復交通費が支給されるが、それ以外はすべて無償のボランティア活動である。

4. 調査方法

バディがどのような活動を、どのようなことを考えながら行ったか、また留学生はバディ活動をどのように捉えているかを調べるために、以下の3つの調査を行った。

1) バディ活動後のアンケート調査

オリエンテーション期間が終わってから2週間後に、バディ活動に関する自由記述方式のアンケート調査を行った。アンケートは、次回のバディ活動の参考にする目的で全バディに、Eメールを使って依頼した。アンケート調査の目的は、バディ活動がどのように行われたか全体的に把握することである。質問内容は主にバディ活動の感想で、以下の通りである。

アンケートの質問

(1) 名前：

(2) バディ活動として、何をしましたか。

(3) 何語を使ってコミュニケーションしましたか。多い順に言語名と、何%くらいかを書いてください。だいたいでもかまいません。

① _____ 語 (%) ② _____ 語 (%) ③ _____ 語 (%)

(4) 留学生とコミュニケーションして、難しいと思ったことはありましたか。それはどんなことですか。自由に書いてください。

(5) コミュニケーションが難しくなったとき、どのような方法をとりましたか。その結果はどうでしたか。自由に書いてください。

(6) 今回のバディ活動を通して、何か学んだこと、新しく知ったことはありましたか。あった人は、その内容を書いてください。

2) アンケート回答者へのインタビュー調査

アンケートに回答したバディのうち、バディ活動期間終了後も定期的に継続して担当留学生と交流している学生を中心に、更に詳しくインタビューを行った。目的は、交流が続くバディ活動では、どのようなことが考慮され、どのようなことが行われているかを把握することである。インタビュー時間は1人当たり20分から30分であった。

3) 留学生からのインタビュー

バディ活動期間終了後もバディと交流を続けている留学生6名に、バディに関する感想を中心にインタビューを行った。

5. 結果

5. 1 受け入れ側学生によるバディ活動の感想（アンケート調査から）

アンケートの回収率は19%(14名)であった。結果は以下の通りである。質問(1)は名前なので省略する。

質問(2)バディ活動として何をしたか。

報告されたバディ活動内容は、以下の通り（複数回答あり）であった。空港出迎えを除き、全てバディが自主的に行った活動である。

- ・ 空港出迎え（8名）
- ・ いっしょに食事をする(4名)
- ・ 海浜幕張周辺の案内（3名）
- ・ 日用品の買い物の付き添い（2名）
- ・ 大学で会う（2名）
- ・ リムジンバスに忘れた物を一緒に取りに行く（1名）
- ・ オリエンテーションの際の通訳（1名）
- ・ 外国人登録の際の付き添い（1名）
- ・ 留学生の住むマンション周辺の案内（1名）
- ・ お好み焼きパーティー（1名）
- ・ メール交換（1名）

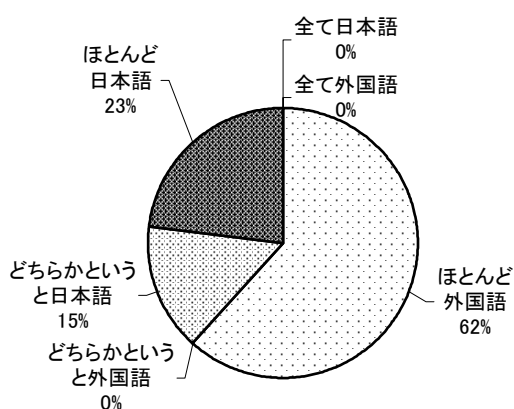
また、思ったように活動できなかったバディから、以下のような理由が挙げられた。

- ・ 他大学の学生と仲が良く、会えなかった。(1名)
- ・ 空港への出迎えが必要ななかったので、会うタイミングを失った。(1名)
- ・ メールを出しても返事が返ってこなかった。(1名)

質問(3)何語を使ってコミュニケーションをしたか。

バディ活動にどの言語を使用したかについては、留学生の日本語レベル、留学生の希望、バディの希望などさまざまな要因がはたらいている。バディが留学生の母語や外国語をどのくらい使用したと感じているかは、図1の通りである。

図1 バディの使用言語



半数以上のバディが「ほとんど外国語で交流した」と感じている。そのうち1名は、80%を留学生の母語（インドネシア語）で交流し、15%は英語を使用している。1つの言語だけを使用したバディは0人(0%)で、状況やお互いの言語能力に応じて、日本語を含めたいくつかの言語を使って支援を行っていたことがわかる。

周(1993b)では、被支援者が必要としていないサポートを受け取ることは、迷惑や過保護になりやすく、欲求に対応するサポート

が最も受け手の幸福を増すとしている。バディ活動は、受け入れ側学生が自分の学習している言語を磨くチャンスではあるが、それは副産物であり、使用言語も留学生の希望に応えながら支援していく気持ちが必要である。

約3週間のバディ支援の後、留学生はチューターを申し込む機会があるが、その際ほとんどの留学生が自分の母語を知らない受け入れ側学生を希望している。生活基盤を共に整えてくれたバディには感謝をするが、これからは日本語学習のために日本語だけを使いたいというのが理由である。外国語大学の支援では支援側も被支援側も言語学習者であり、外国語を話したいという意識が強い。「チューターと留学生の期待が一致していないと問題になる場合がある（横田・白土 2004）」とされているように、どの言語を使用するかについては、バディが「支援活動である」ということを念頭において活動する必要がある。

質問(4) 留学生とコミュニケーションをして、難しいと思ったことはどんなことか。

コミュニケーションが難しいと思った理由は、KJ法により、言語的理由、文化的理由、心理的理由、物理的理由の4つのカテゴリーに分けられた。

<言語的理由>

自分の外国語能力

- ・ (自分が) まだ1年生なので、継続して韓国語を話すのには苦労しました。
- ・ 担当した留学生も **native language** が英語ではなかったのですが、やはり自分の英語力のなさを感じました。
- ・ ポルトガル語がうまく通じなかった。

自分の日本語知識

- ・ 分からない日本語を言い換えたり説明したりするのが難しく感じました。

留学生の日本語能力

- ・ 留学生が日本語を使おうとしなかった。
- ・ 留学生は日本語を勉強しに来ているから日本語をはなさなければならないけれど、やはり英語でのコミュニケーションのほうが会話が円滑に進むので、ついついお互い英語を話してしまいがち。

<文化的理由>

- ・ 文化が違うので失礼なことを言わないように注意しました。今思えば、私が担当した留学生は日本語がペラペラだったし、日本について勉強してきていたようなので、心配することはなかったかなと思います。
- ・ お互いにまだ勉強中なので、正しいと思っていて話していても、間違っていたり、失礼になったりすることがあった。例えば敬語や人の呼び方などで、日本語とはかなり異なるので。

<心理的理由>

- ・ 初対面ということで会話が途切れることはあったと思います。
- ・ 最初は話すのに緊張して何をしたら良いか分かりませんでした。
- ・ お金の感覚（が違うので、どうすればよいか迷った）。

<物理的理由>

- ・ 空港で別々のゲートで待ってしまって、会うのに時間がかかった。
- ・ 留学生が日本に着いたばかりで、とても疲れていた様子がとても伝わってきました。

言語的理由としては、バディ自身の外国語能力についてと日本語知識、留学生の日本語能力が挙げられた。また、半数以上（8名）のバディは、コミュニケーションは特に難しくなかったとし、その理由として、「留学生の日本語が予想していた以上に上手で、特にコミュニケーションの上では困った点はありませんでした」のように留学生の日本語能力が高かったことが挙げられた。

このように、バディの多くはコミュニケーションが難しいと感じる場合は、自分の外国語能力か日本語知識によるものと考え、コミュニケーションが易しいと感じる場合は、留学生の日本語能力が高い場合であると判断する傾向が見られる。

多くの先行研究（加賀美 1999、高松・白土 1996、坪井 1993 など）にも、留学生が日本人学生とのコミュニケーションに難しさを感じる理由として言語的理由が挙げられているが、本調査の結果は、受け入れ側学生にとっても留学生とのコミュニケーションの難易に言語的要因が大きく影響していることを示唆している。本バディ活動では、留学生の日本語能力のみが問題にされるのではなく、担当留学生の母語を話す役割を与えられているバディも、留学生と共に言語の壁を越えようと努力することが要求される活動であるといえる。

質問(5) コミュニケーションが難しくなったときの解決方法

KJ法により、コミュニケーションが難しくなったときの行動を「道具・リソースを使う」「相手の立場になる」「積極的なコミュニケーション」の3つに分類した。

<道具・リソースの使用>

- ・ ジェスチャー、ボディーランゲージを使う。(2名)
- ・ 絵を描く。(2名)
- ・ 英語を話す。(2名)
- ・ どうにか伝えようとして、知っている言葉をできるだけしぼりだしました。
- ・ 英語を話して場をなごませた。
- ・ 文字を書く。
- ・ バディが3人なので相談しました。

<相手の立場になる>

- ・ 相手が違う環境で育って、初めての海外&日本なんだということを頭に入れた。
- ・ 自分が初めて中国に行ったときはどうだったかなどを考えながら接するようになった。

<積極的なコミュニケーション>

- ・ やはり笑顔から作っていった安心させることが一番だと思いました。あとは、面白いことををしたりして自分のことを知ってもらうことが重要だと思ったので、コミュニケーションが取れなくても近くにいることが大事で、そのため皆さんが安心して話しかけてくれるようになりました。
- ・ 初めはぎこちなかったのですが、だんだん慣れてきて一緒に食事をするなど交流を深めています。

質問(4)に見られたように、コミュニケーションの難しさの一つに言語の壁があり、それを越えるためにやはり言語或いは言語に代わるものを使用するストラテジーをとっていることが伺える。これは、おそらくバディだけではなく、留学生も絵やジェスチャー、英語など、同様の方法を使って、コミュニケーションしていると予想される。ここには受け入れ側学生と留学生が、支援者と被支援者の関係だけではなく、共に壁を感じ、共にそれを打開しようとする協働の試みが見られる。

「相手の立場になる」という解決法には、バディ自身の留学体験や海外体験が役に立っていると考えられる。海外経験がなければ相手の立場になれないというものではないが、外国語大学という環境のため、スタディ・ツアーや留学などの海外体験をしているバディ、または留学を目前にして海外留学生活に対する具体的な緊張を感じているバディは多い。留学生にとって、自分と同じ状況に置かれた経験をもつ支援者から共感を得られるということは、1つの安心感につながり、仲間としての連帯感も生まれるのではないかと思う。

「積極的なコミュニケーション」は、留学生とのコミュニケーションが最初からうまくはいかないということを受け入れ、自分をわかってもらう努力や、相手が心を開きやすい

雰囲気を作る努力をしている。また、そういう努力の積み重ねがよりよい関係を導くと信頼すること（手塚 1995）もここに見られる重要な点である。

質問(6) バディ活動を通して学んだこと

最後にバディ活動を通して学んだことを記入してもらった。

<留学生について>

受け入れ側学生は、普段、自分と一緒に授業を受講している元気な留学生を目にしたたり、チューターやクラスビジターなどの活動を通して、積極的な留学生たちの姿を知っているので、留学生も自分たちとは何ら変わることのない学生として捉えているかもしれない。しかし、来日直後の留学生と向き合うことにより、学期中には気づかなかった留学生の不安や心細さを察することもあったようである。

- ・ 自分が初めて1人で海外に行った時不安だったように、留学生も多かれ少なかれ不安を抱えているんだということを考えられるようになりました。
- ・ まだ1, 2度しか会っていないので何とも言えませんが、やはり日本に来たばかりの不安が伝わってきたのでできるだけお手伝いできたら、と思いました。
- ・ やはり初めての日本ということもあって緊張していたようだった。

<異文化間コミュニケーションについて>

来日直後という激しい環境変化に直面している留学生に配慮しながらコミュニケーションをし、しかもバディという役割を果たさなければならないという課題に取り組むことが、言語とは切り離せない文化についてより深く考えることにつながったのではないかと考えられる。自分たちとの相違点だけではなく、類似点にも気づいていく過程が観察される。

- ・ 私たちは日々言語を勉強しているのですが、やはり話せるだけではダメだと思いました。学んでいる言語の背景となっている文化を学ぶことがなくては、その国の人と本当のコミュニケーションははかれないと思いました。
- ・ 改めて日本とアメリカの価値観の違いなどを感じることができてよかったと思う。
- ・ 留学生の部屋に行き招かれたのですが、とてもよくしていただいたので驚きました。そこにはすでに留学生が2人いて、まるで日本人のようにお茶とお菓子を出してくれてとても嬉しかったです。とても気持ちよく過ごすことができました。
- ・ ポルトガル語を勉強しなければいけないと思った。留学生がどうして日本語を使わないのか疑問だった。
- ・ 留学生は意外なことが不思議なようで面白かったです。(なぜ列を作るのか、等)

一方、バディ活動を通して、新しく知ったり学んだりしたことはなかったという回答も4人のバディに見られた。

5. 3 受け入れ側学生へのインタビュー調査から

バディ終了後のアンケートに回答してくれた受け入れ側学生のうち7名の学生にインタビューを行った。インタビューの目的は、留学生と交流が続いているバディがどのようなことを考え、どのようなバディ活動を行ったかを把握することである。7名のうち、3名はバディ活動期間終了後も継続的に1週間に1回以上定期的な交流を続けており、4名はバディでできた関係を切らないよう交流を続ける努力をしている。いずれもバディ活動期間終了後も留学生との交流に積極的に関わっていこうという気持ちをもつバディである。

インタビューの結果、バディ活動で築き上げた関係を更に深化させていくようなバディの態度や姿勢が見られた。

<話を聴く>

加賀美(2002)は、援助者はまず相手の「話を聴く」ということが重要であり、それは相手の感じていること、言わんとしていることを自分の理解の枠組みではなく、「相手の枠組み」で理解しようと耳を傾けることであるという。相手の枠組みで理解することは自分の価値観とは違う価値観を見出し、認めることであり、容易なことではない。バディにとって、<話を聴く>ことは「異文化間葛藤を意識し、克服すること(加賀美 2001)」を意味することもある。

バディ活動期間終了後も留学生と関係を深めているAさんは、異文化間葛藤とそれに対する自分の気持ちをいくつかの点から述べている。次のエピソードはその1つである。

最も大きなショックだったのは、留学生が大学から指定されたアパートの部屋を変えてもらいたいと強く訴えたときだった。日本人なら我慢したり遠慮がちに話すところを「本当にはっきりいう」こと、部屋を替わりたい理由がアパートのルームメート(留学生)に対する民族的なイメージであり、先入観による判断が強いこと、更に担当留学生の親も同じ考えでいることだった。担当留学生に「日本語が不十分なので部屋を替わりたいと係りの人に伝えてほしい」と言われ、「言っておく」と言ったものの、実際には言いつらく、悩んだ。結局その話はいつの間にか留学生の口から出なくなり、解決したのだと思う。(A)

Aさんにとって「相手の枠組み」で理解することは大変だったかもしれないが、少なくとも理解しようと耳を傾けていることは、Aさんがこの問題について、留学生のかなり詳しい状況まで知っていることから伺える。当時留学生の住居担当者に事情を話すことが必ずしも解決法だったとは言えず、Aさんのように話を聴き続けてあげることが目に見えない解決につながっていったのかもしれない。

Bさんは、担当留学生の話を聴くのがとても好きで楽しいという。また、自分が海外でホームステイをした時に、言葉ができなくて話すのが大変だったことから、言葉が自由に使えない気持ちがわかる、だからたくさん話を聞けるという。留学生は自分の気持ちを理解してくれそうだと思う援助者を選び、その人に自分の心を開いて話す(加賀美 2002)。どちらかといえば普段自分からはあまり口を開かないBさんの担当留学生が、Bさんとの交流

(自主的チューター活動⁸)では、活発なコミュニケーションを行っていたのは印象的であった。

支援者は、「とにかく相手に何かを助言したいという気持ちが先立ってしまう(加賀美2002)」が、相手の話に耳を傾けることも積極的な支援であるといえる。バディは話を聴くことによって、自分の気づかなかった「相手の枠組み」へと視野を広め、留学生も話すことで自分の気持ちを整理し、気づいていくことがあると考えられる。支援者・被支援者の関係を越えた、相互行為的な学びが「話を聴く」ということから始まるといえる。

<相手の視点に立つ>

異文化間対人関係では、自分とは異なる相手の視点に立ち、自分の行為が相手にどう受け取られるか、相手は一体何を求めているか、どうしてそのように考えるのかを考えることが重要である(手塚1995)という。

バディ、チューターと同じ学生を担当したCさんは、以下のようなエピソードを話した。

留学生から最初いきなり「なるべく日本語を使ってほしい」と言われたので日本語で話したところ、相手からは全部相手の母語で返ってくるので、どうして日本語で話さないのか疑問だった。自分が海外に行ったときは、せつかくのチャンスなのでずっと現地での言語で話そうと思っていたのに、担当留学生はそれをしないのはなぜか。よく考えると、自分が相手の言語が理解できる存在であることに気づき、自分も海外で日本語が通じたらやはり日本語を話したかもしれないことに思い至った。(C)

Dさんは、留学生の買い物の手伝いがとても大変だったという。

自分が担当留学生の母国へ行ったときは、全てが安くて何でも買ったり食べたりしたが、その逆に日本へ来た留学生にとっては全てが高く感じる。そのため、安いお店へ連れて行っても「高い」と言われたり、他の店に行きたいというので他の店に連れて行くと、また元の店に戻りたいという。また一旦買ったものも、実は高かったのではないかとずっと心配している。しかし、留学生の母国へ行ったとき、自分たちもやはりあちらのチューターに同じように、あっちの店へ行きたい、こっちの店へ戻りたいと言い、ずっとつきあってもらったことを思い出した。(D)

Dさんは留学生の状況に身を置くと同時に、自分たちの行動を振り返るきっかけになったようである。また、Dさんは活動中、留学生の経済状況に気を使い続け、次のような経験をした。

割り勘にするはずのパーティーの材料費を安く留学生に請求したとき、それに気づいた担当留学生に「ちゃんと割らないと友達じゃないよね」と言われた。(D)

相手の経済的なことを考える配慮と、親密さを深めていくために必要な対等さの balan

スが難しいことを実感している。後日この担当留学生からは、

バディも同じ大学生だからお金がないのは自分たちと同じ。自分たちだけが負担を軽くしてもらってはよくないと思った。(Dの担当留学生)

という発言が聞かれた。バディにとっても、担当留学生にとっても、この一件は心に残るものであり、本当の友達関係を築いていくための両者の歩み寄りの1歩であったようである。

また、「留学生は大げさに笑ったり、音楽を聞くとときも体を大げさに揺すったりして、自分を出すのがうまいと思う。そういうのを知るのは、びっくりすることもあるが、普通に納得しあう。」「気候が違うところから来ているからだと思うが、(留学生が)厚着をするので心配。」「作ってくれた料理がしょっぱくて驚いた」等、小さな趣向や習慣の違いも、大きくは価値観の違いであり、1つ1つが驚きや発見から始まり、やがて違いを認められるようになってくる過程が見られた。

自分の価値観や信念と違うところから来る行動を理解することは容易なことではないが、バディという役割意識は、自分の中の異文化間葛藤を通して留学生を理解しようとする行為へつながる。そして受け入れ側学生から留学生への理解は更に、留学生から受け入れ側学生への理解、つまり相互理解へとつながっていくのではないだろうか。

<共通性・類似性の発見>

異文化間には前段落に見たように相違点もあるが、類似点もある。人間関係は常に何らかの共通性、類似性の確認あるいは発見により形成維持されるプロセスであり(手塚 1995)、異なる文化的背景を持っていても、差異だけに注目するのではなく、その中に共通性を見つけ出していく努力をする(鈴木 1997)ことが大切である。バディ活動期間終了後も担当留学生と定期的に継続して会っているバディは、以下のように類似性への気づきも感じている。

- 学校で勉強していると、どうしても宗教的なことばかり頭に浮いてしまう。話してみると、やっぱり同世代で考えていることは変わらないし、「かっこいい!」「かわいい!」とか言ってるし、服装とかも、もっと昔っぽいものを想像していたら、結構普通だったので、国は違うけど年頃がいっしょなので、想像とは違いました。
- 体験を聞いたり、どこか行った話とか、食べ物の話とか、違うなと思うのはそれくらいですけど。基本的なところは同じだと思う。

また、「国がどうっていうより、人がどうって感じだな、人によっていろいろだな」と個人を見つめる姿勢も見られた。異文化コミュニケーションは、様々な次元での文化的同質性を基軸にしなが、異質な文化を楽しみ、異質な文化に学びながら、異質性を乗り越える積極的意志と努力が必要とされ(坪井 1993)、バディにとっても留学生にとっても、お互いの間に起こる1つ1つの相違点や共通点・類似点を、楽しみ、学び、疑問から理解へと

交流を深化させていくことが伺えた。

<学ぶ姿勢>

バディ活動は、バディが留学生に教えるだけでなく、自分自身に気づいたり、学ぼうという姿勢にもつながったようである。たとえば、次のように、支援に必要な知識を得ようとする姿勢である。

- ・ 日本語の細かい表現だとか、そういうことを上手く説明できない。日本語としては、普通に私たちは日常で何気なく使っているから、わかるように説明できない。
- ・ 担当留学生の国についてあまり知らなかったが、話しているうちに興味を持って、いろいろ調べた。

言語に関しては、バディは留学生の母語を学習中であるので、それぞれ自分の弱点など気づきがあったようであるが、あくまでも支援であることを忘れてはいけない。交流がうまくいっているところでは、「留学生の日本語能力が高いので相手の言語を話す機会がほとんどなかったようだが、それでもよかったか」という質問に対し、「全然問題ない。相手の言語を使うチャンスがあるかどうかについては、考えたこともなかった」のように自分の利益については考えていなかった。留学生が日本語で話しているにもかかわらず、バディ側が学習中の言語を使うことに熱心だったペアでは、多かれ少なかれ留学生から、日本語を話すバディがいいという要望が出た。しかし、どのペアも完璧なコミュニケーションを可能にする言語は持ち合わせないため、「必死でボディランゲージを使った」「今まで教科書で習わなかった友達同士で使う言葉に慣れなかったが、頑張ってた」等、一生懸命コミュニケーションをとる努力をしていたようである。

今後、支援システム担当者側も、バディの募集やバディ説明会の際に、留学生の母語を使う意義についてバディに説明し、必要性や相手の希望など状況に適した言語を選択していく重要性を示す必要があるだろう。

最後に、次の学期バディをする人へのアドバイスとして、

- ・ 仲良くなりたいという気持ちがないとできない。それが一番大切。それで会う日を決めたり、連絡をとったりとか、そういう気持ちが大切。
- ・ 留学生のスケジュールを前もって調べておくとか、別科の授業のこととかも少し知っておいた方がいいのではないかと思う。
- ・ 自分から連絡をとらないと、なかなか連絡つかないので、仲良くしたいなら、自分から連絡したほうが良いと思う。
- ・ いっしょに話す機会をたくさんもったほうが良いと思います。

というように、自分から積極的に留学生に関わっていく姿勢を重要視するほか、

- ・ 思っていることをためないで、ちゃんと言い合えたらいい。
- ・ お互いの国の文化についても素直に取り入れて、お互いコミュニケーションする。

のようにコミュニケーションの仕方をアドバイスするものもあった。これらは、バディ活動を通して受け入れ側学生が学んできたことともいえる。自分から積極的に相手にアプローチして仲良くなりたいという気持ちを表すことは、相手を受け入れることを示すことである。人は心理的に困難な状況のとき、自分を受け入れてくれることが心の支えになるもの（加賀美 2002）であり、来日当初の孤独や不安に対して心の拠り所を提供できるのではないかと思う。

以上のように、バディ活動期間終了後も交流を続けていたり、交流を続けようとしているバディにいくつかの共通点が見られた。彼らは交流を単に続けているだけではなく、交流によって、人間関係を深化させていると考えられる。

5. 4 留学生へのインタビューから

バディ活動期間終了後も担当バディと交流を続けている留学生6名にインタビューを行った。

彼らに共通する特徴として、バディ以外の日本人学生とも活発に交流を行っているということが挙げられる。バディ活動やチューター活動のような個人対個人の関係形成する支援活動では、支援者側だけのあり方ではなく、被支援者側の個人的特性も大きく関わってくると考えられる。留学生からはバディ活動に対してさまざまな思いが寄せられた。

<よかった点>

情報の支援

- ・ 銀行口座の開き方を教えてもらった。
- ・ 財布をなくしたとき、警察署での手続きを手伝ってもらった。
- ・ バディがいないときは、寮の道だけしかわからなかった。自転車もないし、バディがいなかったら大変だった。安いところ、レストランとか教えてくれた。アイデアはたくさんもらった。バディも学生だから、何がほしいかすぐにわかる。
- ・ 一緒にスーパーに行ったり、電車やバスに乗ったりした。切符の買い方やスーパーでの買い方、日本の生活の仕方をバディに教えてもらったので、大丈夫になった。
- ・ 図書館の使い方、6号館のパソコンの使い方を教えてもらった。機械の使い方はちょっと難しい。

異文化間コミュニケーション

- ・ コミュニケーションの仕方について話すのがおもしろい。
- ・ 文化とか結婚とか友達について、また日本語と自分の母語について話すのはおもしろい。
- ・ 自分の母語は使わなかった(バディは自信がなかった、恥ずかしかった)が、みなさんが質問して、私が教えてあげた。日本語で教えてあげた。

言語の支援

- ・ 来日当初、日本語の聞き取りができなかったので、スーパーで買いたい物の名前がわからないとき、教えてくれた。自分の母語で話してくれて、すごくよかった。
- ・ 今は日本語が話せるが、以前は話せなかったので、バディがいてよかった。
- ・ アニメで日本語を勉強したため、男言葉と女言葉の区別がつかなかったが、バディに教えてもらった。
- ・ 日本語と英語で話せるからいい。(母語は英語ではない。)

<バディへの要望・アドバイス>

コミュニケーションについて

- ・ 携帯電話がない1ヶ月は、コミュニケーションが大変だった。
- ・ 会ってすぐ、次の週くらいからいっしょに食べるのがいい。メニューを説明してもらえる。フリータイムにいっしょに映画を見たい。
- ・ 次の留学生が来たときは、その留学生と話して、その留学生の興味に合ったバディ活動をするのがいい。

言語について

- ・ 日本語を話すためには、自分の母語を勉強していない学科の人のほうがいい。
- ・ 日本語でメールを書いても、返事が自分の母語で返ってくる。日本語のほうがよかった。

支援システムについて

- ・ 特別なスケジュールがあったほうがいい。私が見たいとき、バディは忙しい。
- ・ 日本に来たばかりのときは、バディは絶対必要。バディも忙しいときがあるので、なるべくたくさん的人数をつけておいてほしい。
- ・ 来日する前に、バディがつくという情報がほしかった。日本についたら、どうしたらいいのかわからなかった。

さまざまな国から来日した留学生は、文化的にも個人的にも多様であり、バディの支援に対してもさまざまなコメントが寄せられた。また、バディ活動についてインタビューしたのであるが、バディには関係のない異文化体験の話になることも多かった。バディ活動期間中は、バディを助けとしながら、新しい環境に対する驚き、喜び、期待などさまざまな感情が大変大きく留学生の心を占めていたようであり、予期しなかったことが一度に押し寄せる来日当初の留学生の状況が伺える。来日直後の留学生は、日本での経験がまだ浅い場合が多いため、バディは多様な理解の枠組みがあることを理解することが求められる。

また、留学生が携帯電話、Eメールなどを自由に使えないバディ活動期間中は、留学生とバディが連絡を取りやすいような態勢を、支援システムの担当者も工夫していく必要がある。また、今回バディとの交流はなかったという交換留学生1名(男性)は、「空港に着いて出てきたら、日本人の女の子が3人くらい待っていて、電話番号を渡されてびっくりした」そうであり、このような困惑を起こさないためにも、協定大学間でバディに関する活動情報をシェアしておくことも重要であろう。

今回、留学生に対して日本語でインタビューを行ったこと、インタビュアーが留学生に日本語を教えている教師であることから、データとしては限界のあるものであることは否めない。バディやチューターに関して、なるべく留学生の気持ちや意見を汲み取っていけるような方法を考えていくことは今後の課題である。

6. さいごに

来日直後の留学生を対象としたバディ活動において、バディ活動期間終了後も交流が定期的に継続されている組み合わせでは、どのようなことを意識しながら、どのようなバディ活動が行われていたのか、受け入れ側学生に対するアンケート調査とインタビュー調査、留学生に対するインタビュー調査によって概観した。

その結果、次のようなことが示された。

①受け入れ側学生が一方向的に支援を行っているのではなく、受け入れ側学生と留学生が共に、言語の壁、物理的壁、心理的な壁、文化的な壁など、さまざまな異文化間交流を阻害する壁を乗り越える努力を、試行錯誤をまじえながら行っている。また異文化間に生まれる葛藤を通して相手をより深く理解しようとしている。

②留学生の母語を使うという支援方法は、留学生がそれを受け入れるときは非常に効果的であるが、留学生が日本語を使いたいときは、支援の押し付けになり、留学生の自尊心を傷つけたり、過保護感を与えたりする、諸刃の剣となる。

③留学生はさまざまな文化背景の環境から来日し、また個人的な多様性もあり、バディは多様な理解の枠組みを理解していかなければならない。

これらのことから、留学生支援の場は、単に留学生に対する支援という一方向的なものではなく、相互行為を通して得られる発見や気づき、学びの場であり、留学生と受け入れ側学生の協働の場となっていると考えられる。

留学生は多様であり、バディは相手が何を支援してほしいのか察したり、予想したりしていかなければならない。また、バディ活動が相互行為の活動である以上、交流がうまくいくかどうかは、バディだけではなく、留学生とバディ両者の交流の仕方にかかっている。今回バディ活動がうまくいっても、次の学期も上手くいくとは限らない。逆に今回はうまくいかなかったが、次の学期で感動するような人間関係を築けるかもしれない。あるいは、バディ活動期間が終了してから、バディと留学生の関係が発展する可能性もある。どうい場合でも、バディは相手の話を聴き、留学生を積極的に受け入れていく態度を示すことによって、「相互尊重、相互信頼を確立する活動（横田・白土 2004）」としての相互行為的な支援活動が実現し、そのような活動を重ねるにつれ、お互いの人間的成長につながるのではないかと思う。

本調査に協力してくれた学生は、バディ活動に対して積極的だった学生であるといえる。今後このような協働の場をなるべく多くの学生に経験してもらうためにも、たくさんの学生が留学生支援システムに参加し、意義ある時間を送れるよう、システムの改善を続けて

いきたい。

また、バディの中には、留学やスタディ・ツアーを経験を生かしながらバディをはじめさまざまな留学生支援に参加し、そして再び自分自身が本格的な留学生生活を送る学生や、就職活動をしながらもバディなどの支援活動に参加し続けている学生もいる。加賀美(2001)は、日本人と外国人が日常的に相互作用でき、互いに学びあい国籍を超えた人材育成の場を作ることは、異文化交流の最終的な意義であるとしている。留学生支援活動の経験から学んだ学生が、今後更に複雑化、緊密化していく国際社会で通用する人材となっていくことを期待している。

最後になるが、筆者自身も留学生支援システムの担当者として、受け入れ側の日本人学生、留学生、そして支援システムを担当する他の教師や大学職員と接することによって、気づき、学ぶことが多々あった。留学生支援システムは、学生だけではなく、システム担当者や大学側、海外協定校などが関わりあい、多方向性の相互行為活動によって成立する複合的な協働の場であるといえよう。

注

1. 第Ⅱ部参照。
2. 受け入れ側学生には、学部と大学院の日本人学生と留学生が含まれている。
3. 第Ⅱ部参照。
4. 支援した受け入れ側の学生と、支援を受けた留学生の両者。
5. 学科については、第一部参照。
6. 2005年度春学期から実施。
7. 2005年度春学期から実施。
8. 定期的に会って日本語を勉強する関係が自発的に形成された。

参考文献

- 加賀美常美代(2002)「留学生への相談支援体制ー留学生の心とどう向き合うかー」『留学交流』14-11、6-9頁。
- 加賀美常美代(2001)「留学生と日本人のための異文化間交流の教育的介入の意義」『三重大学留学生センター紀要』3、41-53頁。
- 加賀美常美代(1999)「大学コミュニティにおける日本人学生と外国人留学生の異文化間接触促進のための教育的介入」『コミュニティ心理学研究』2-2、131-142頁。
- 外国人留学生問題研究会(1990)『留学生と異文化間コミュニケーションー留学生との相互理解を深めるためにー』凡人社。
- 周玉慧(1993a)「在日中国系留学生用ソーシャル・サポート尺度作成の試み」『社会心理学研究』8-3、236-245頁。
- 周玉慧(1993b)「在日中国系留学生に対するソーシャル・サポートの次元 - 必要とするサポート、知覚されたサポート、実行されたサポートの関係 - 」『社会心理学研究』9-2、

105-113 頁。

鈴木一代(1997)『異文化遭遇の心理学ー文化・社会の中の人間』ブレーン出版。

高松里・白土悟「コミュニティ心理学から見た留学生指導ー九州大学留学生センターの事例からー」『九州大学留学生センター紀要』8、75-88 頁。

田中共子(1996)「日本人チューター学生の異文化接触体験(2)」『広島大学留学生センター紀要』7、84-108 頁。

坪井健(1993)「在日留学生と日本人学生ー何が留学交流を阻害しているかー」『アジア文化』18、102-111 頁。

手塚千鶴子(1995)「異文化間対人関係」渡辺文夫 編『異文化接触の心理学』(133-146 頁)川島書店。

徳井厚子(2002)『多文化共生のコミュニケーションー日本語教育の現場からー』アルク。

堀江未来(2003)「留学生の心のケアー「部分的ケア」から「ともに学ぶ環境づくり」へー」『留学交流』2003.11、10-13 頁。

水野治久(2003)『留学生の被援助志向性に関する心理学的研究』風間書房

箕口雅博(2003)「留学生の心のケアと多様なアプローチの必要性について」『留学交流』2003.11、2-5 頁。

村田雅之(1999)「インターフェースとしてのチューター」『異文化間教育』13、120-131.

村田雅之(1996)「チューターの援助と仕事観」『飯山論叢』13-2、49-76 頁。

山口薫・山口和代・梅田康子(2004)「瀬戸キャンパスにおけるチューター・メイト活動」『南山大学国際教育センター紀要』4、156-171 頁。

横田雅弘(1990)「留学生と日本人学生の友人関係」『青年心理』84、130-133 頁。

横田雅弘・白土悟(2004)『留学生アドバイジングー学習・生活・心理をいかに支援するか』ナカニシヤ出版。

和田実(1999)「出会いのコミュニケーション」諸井克英・中村雅彦・和田実 著『親しさが伝わるコミュニケーションー出会い・深まり・別れ』(2-36 頁)金子書房。